

招待席

「掌編小説」

こんにちは

天津孔雀

私はほぼ義務教育を受けていないに等しい。

それでも時々同じ年頃の子供達が楽しそうにしているのを見ると羨ましくなつて学校に行つた。しかし、男の子のように髪を短く刈り込み、既定のセーラー服ではなく男子生徒用の学生服を着て自分のことを「僕」といい、男の子としてふるまう私は、教師からも生徒達から見慣れぬ異邦人として扱われ、遠ざけられ、いじめられた。彼らは私が女であるという刻印をどうにかして私の魂に打ち込もうとしたのだつた。

だから基本的に私は学校が大嫌いだ。しかし、それでも私は学びたかつた。まだ知らぬ美しい言葉を、まだ見ぬ美し

い絵画を、まだ聴かぬ美しい音楽を。

それは何故か？ 私は美しくなりたかつたのだ。人間は保護色の動物で身を置く環境に大きく左右される。美しいものの中に居れば必ず自分も美しくなれる。そう頑なに信じていた。

そんな私は遮二無二本を読んだ。図書館が唯一の安心できる場所であり、書物が唯一の友だちだつた。

上田敏の執拗にまで美麗な翻訳の一字一句に息をのみ、日夏耿之介の難解な漢字の持つ字体のエロティシズムに魅了され、三島由紀夫の端正な文体から匂い立つ同性愛の甘くほろ苦い馨に酔い、美しい魑魅魍魎が跋扈している中井英夫のデカダニズムを美酒と飲み干し、そして並ならぬ憂いの美に満ちた鈴木信太郎の翻訳のボードレールに心酔した。私が鮮烈に美を感じるもの、それらはみな私にとつて隠されているユートピアからの呼び声であつた。

消え入りそうで控えめで、微かで仄かでしかし強烈に耳に残る呼び声は通りすがりの風景の中や人物、何げない言葉のひとつかけらの中に姿を見せることも度々あつた。

ある日一面青田に蔽われた田舎道を歩いていると、田んぼの中に真白なベガサスの彫像がうち捨てられてあつた。今にも空へ駆けあがらんとする姿のまま。おそらく以前は何処かの看板だつたのだろう。不遇な環境に置かれていることをものともせず翼は折からの日差しを受け天使のそののように純

白に気高く輝いていた。閉鎖されたゲームセンターの屋根では作り物のライオンが聲の無いおたけびをあげ、廃園になった遊園地ではメリーゴーランドが永遠に静止している。しかし、森閑とした空気の中で偶像たちはユートピアを求めて叫ぶのを止めない。世の中に打ち捨てられた、私と同じように。

隠されているユートピアからの切なる呼び声はある日、一人の女性として私の前に姿を現した。当時の私は男も女も嫌いだ。少女も少年もやがて大人になり穢れていく。

そういう図式が目に見えるようで哀しかった。しかし、彼女だけは違つて見えた。恋愛とも呼べぬ、手の届かない芸術品に憧れるような気持が一二歳の私の胸にこんこんと湧き出た。ナルキッソスが身を投げた暗い泉のように。私の心は今正に水仙の群れ咲く土手に立っているのだ。その根の持つ強烈な毒に痺れながら。戀とは時に死に至る病だ。そして、片思いは必ず悲劇に終わる。薔薇の浮かぶ血だまり。それが戀だ。

初めて彼女を見かけたのは夕暮れ時の町外れだった。草だらけの鄙びた道で犬を散歩させていた。よく手入れされた小さなブードルを。彼女はまるでイダルルピンシュタインのように酷く痩せていた。画家のロメーン・ブルックスが彼女を見たら間違いないモデルにしただろう。派手な丈の短い黄色のワンピースを着ていて、髪は艶のない金髪、目は世間を拒

絶するように無表情だった。顔麗美の具現化。彼女にはそんな言葉が大袈裟でなく似合った。私は、彼女に強く魅かれた。彼女は何処かしら悲劇的なものを私に感じさせたのだ。永遠に私が惚れつつも絶対的にそこからはじき出されている、ある一つの世界。彼女からはその世界の馨がした。五月の盛りだマスク系の棘多き薔薇のように、濃厚に。

それ以来同じ時間帯に彼女を初めて見かけた場所へ行くようになった。紅蓮に照り映える夕暮れの中に必ず彼女は居た。豪華なカルメンのように。だから私は毎日毎日夕焼けを眺め彼女を待った。悲しい時、何回も夕陽を見た星の王子様さながらに。

私は苦しかった。あこがれの対象を眼の前にしてそれ以上近づくとさえてできない。

私は自分が子供である、いや、女であることにジレンマを感じた。痛烈に。一二歳の少女は、髪を刈り男装をして歩いてみても、どうあがいてもドン・ホセにも光源氏にもなれないのだ。

夢の中では私は常に男であった。空想の翼は肉体の檻を破り魂に性別の無い事を、或は魂はアンドロギュヌスであるということを私に嬉しく思い起こさせる。

やがて何回かすれ違う内に彼女がこちらをチラリと見た。何か話しかけたい気持ちで一杯だったが咽喉から絞り出すように一言「こんにちは」というのが精いっぱいだった。意外

にも彼女は挨拶を返してくれたのだった。「こんにちは」。それは期待通りの少ししゃがれた頹廢の女神の聲だった。目の下の隈さえ伸ばさびて美しく見えた。その聲は私を妖しくときめかせた。

彼女は私にとつての「春の目覚め」であり女の姿をした「サン・セバスティアヌス」だった。彼女への想いはまた性的な知識は皆無に等しい幼い子供の花柄の下着を神秘の朝露で濡らすのであった。

彼女と交わすたつた一言の挨拶が私の世界を明るく満たした。私は来る日も来る日も「こんにちは」の一言のためだけに彼女の散歩するコースへ足を運んだ。

それが一年ほど続いただろうか。ある日、彼女を見かけなくなつた。私は非常に寂しかったが、それでも想像力とは勝手なもので悲劇的な恋愛の結果、何処かの邸に幽閉されている彼女を思うと満足した。大きな鳥籠に閉じ込められても黄色いドレス姿で毅然としている彼女を脳裏に思い描いた。雨の降る日は雨音に重ねて彼女はきつと寂しい旋律の唄を小さな声で歌つたに違いない。まるで遠く離れた私に聞かせるように。長い髪を揺らしながら自らの歌に合せて、彼女は自動人形のように踊る。その姿はヴォーカンソンの傑作のごとし。私の胸は妖しく騒いだ。

幼い私は彼女自身ではなく、彼女の影を愛したのだ。

そして、彼女は帰つて来た。以前よりも健康的な体型となり身なりも清潔感があつてきちんとしていた。左手の薬指には銀の指輪が嵌っている。そしてなによりも、その表情は穩やかでにこやかだった。いつもと同じようにブードルを連れ、私を見ると彼女の方からニコニコと「こんにちは」と挨拶をした。その「こんにちは」は弾んでいた、輝いていた。その「こんにちは」は私には眩しすぎた。強すぎる夏の日差しが憩う木陰を奪つていくように。

私は変わつてしまつた彼女が、頹廢を脱ぎ棄て普通の女性になつてしまつた彼女が酷く哀しく、暫く何も言えず、ようやく「こんにちは」と一言、彼女の後姿に手向けたのであった。

それは私の初めての手酷い失恋だった。

【天津孔雀氏プロフィール】

- ・ 英国生まれ
- ・ 舞台役者 詩人
- ・ 大阪府吹田市在住